

困りごと学 活動報告

統合失調症の「困りごと学」
- 異分野融合により紐解く「見え」-



京都大学



国立大学法人
豊橋技術科学大学



MAKE NEW STANDARDS
東海国立
大学機構



名古屋大学



T-GEX

リハビリテーションの境界

学際的な視点で生活の「困りごと」に挑む — 「困りごと学」の提案

「困りごと学」は、生活のあらゆる「困りごと」を対象とする新たな集まりです。これまでの精神障害領域におけるリハビリテーションでは、特定の機能障害と生活との関係性を軸としてきました。

一方、「困りごと学」では、こうした視点をさらに広げ、日常生活の多岐にわたる困難を幅広く捉え、その解決策を学際的に考えていきます。

困りごとを核とした協働 — ひとりではなく、みんなで考える

人は誰しも「なんとかしたいな」と思うことがあっても、一人だけで解決するのは難しいものです。

そこで、困りごと学では、当事者・専門職・研究者の三者が協力し合う仕組みを大切にしています。

課題を抱える当事者の声や体験、専門職の知見、研究者の探求が交わることで、ひとりでは見いだせない解決策や新たな視点が生まれやすくなるはずです。

協働する過程から生まれるもの — 新しい視点を一緒に見つめませんか

困った体験を丁寧に拾い上げ、それを研究の目線で深く探ると、思いもよらないヒントにたどり着くことがあります。

専門職が現場での支援をさらに充実させることで、社会のさまざまな場面にも新たな可能性が広がるかもしれません。

こうした学際的な協働を通じて、単に一つの問題を解決するだけでなく、暮らしのあちこちに隠れている可能性を切り拓いていくことを目指しています。

困りごとを学問に — 「困りごと学」でリハビリテーションを代える

困りごと学は、まだ始まったばかりの取り組みです。

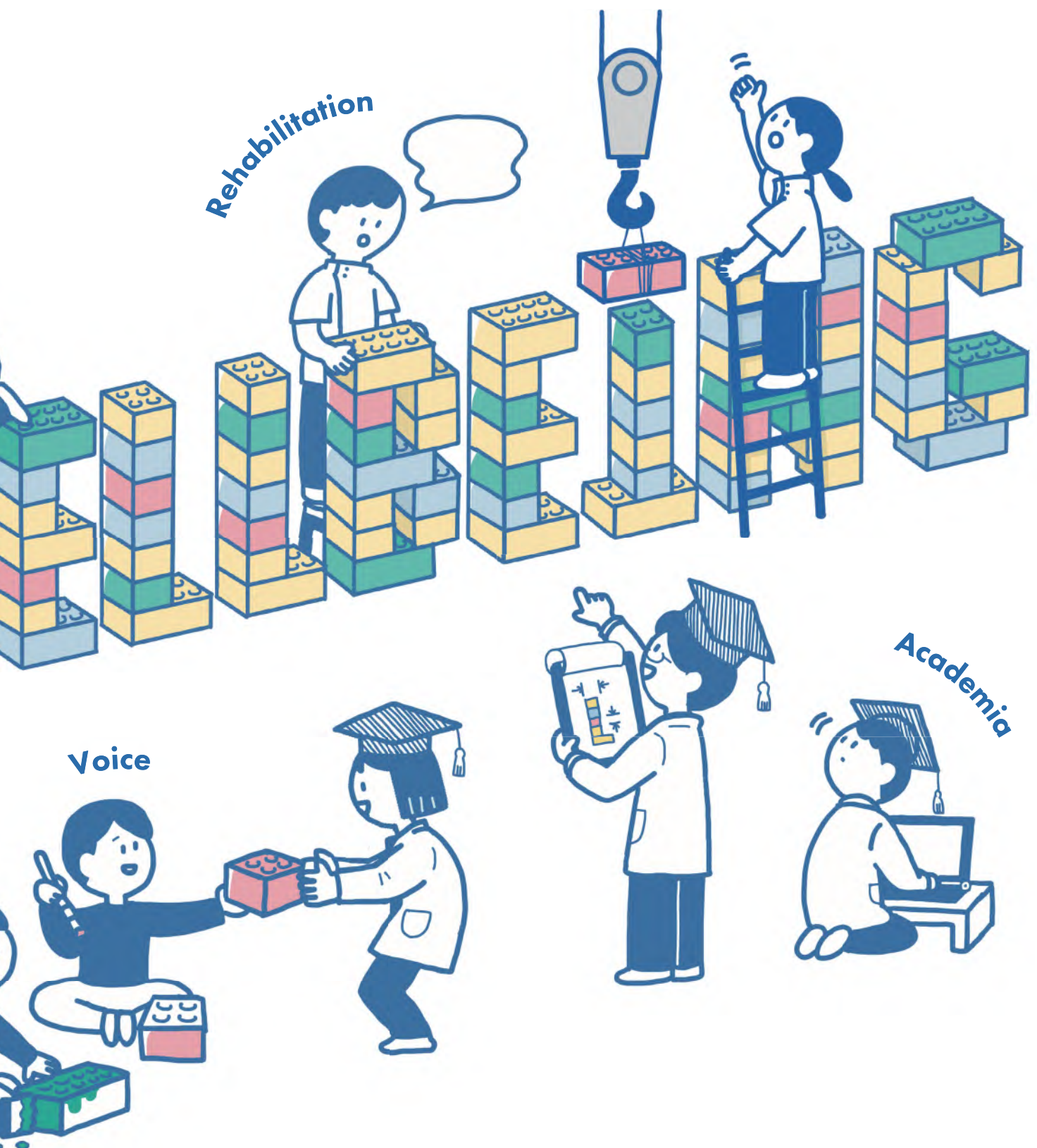
だからこそ、多様な考え方や知識を必要としています。

日常の些細な疑問や不便さを学問的に紐解き、実践へとつなげていくことで、困りごとを軸にした新しい視点が見つかるかもしれません。

私たちとともに、これまでにないリハビリテーションの形を探究してみませんか？



を越える「困りごと学」



1. はじめに

困りごと学では、あえて「障害」を「困りごと」として普遍的に捉え、誰しもが日常的に感じることができるものとして位置づけました。この場の構築とその活動を通して、いろいろな立場が協働したメンタルヘルス領域の課題解決を進めています。

このプラットフォームの立ち上げにあたり、統合失調症の視えをテーマにしたワークショップを開催しました。本ワークショップでは、企画構想に携わった者がクロストークに登壇し、参加者を交えて意見交換を行いました。

2. ワorkshop開催報告

ワークショップの開催概要は以下のとおりです。

ワークショップ開催概要

タイトル 統合失調症の『視えの困りごと』学
異分野融合により紐解く『視え』

日時 2024年12月7日(土) 13:00-17:00

場所 京都大学 楽友会館

対象 研究者および医療福祉関係者など

参加者数 23名

協力 京都大学

「分野横断プラットフォーム構築事業」

内容

1. 話題提供・クロストーク

- ① 困るからはじめる共創
- ② ヒトがモノを見る仕組み：錯視研究を例に
- ③ 社会モデルから捉える機能障害：
視覚機能から社会機能まで

2. ワorkshop



ワークショップ当日の様子

話題提供
01

困るからはじめる共創



話題提供者 小方智広

京都大学大学院医学研究科

人間健康科学科

〔専門〕精神障害のリハビリテーション

ーなぜ困りごとに着目したいのか

企画の発起人という立場からは、「困りごと」から考える機会や場に興味があります。

私はリハビリテーションだけの視点から出発することに限界を感じており、「困りごと学」という場を設けることにより広い視点から課題解決をしたいと考えています。重苦しい雰囲気を持つ「障害」を「困りごと」と捉えなおすと、身近なトピックのように感じられます。幅広い事柄が関係するように思えてきて、様々な視点から意見を活かせるような気がします。人、物、技術が自然と集まってくる場を創りたく、「困りごと学」という名称を掲げました。

困りごとを考えるうえで、ふたつの足場が重要であると考えています。ひとつは、困ることに起因する仕組みの探求であり、もうひとつは困ることを何とか乗り越えぬ術(すべ)の探求です。生物学的な理解としての“もの要素”と病める人への理解としての“ひと要素”があると思いますが、それぞれ役に立つことは異なるはずですが、ふたつの足場は、別のことをしている集団ですが、困りごとの解決には互いが集まった学術の場が必要だと考えています。

異分野を「困りごと」でつなぐ



話題提供
02

ヒトがモノを見る仕組み：錯視研究を例に



話題提供者 田村秀希

豊橋技術科学大学大学院工学研究科情報・知能工学系
〔専門〕視覚科学・実験心理学・認知科学・感性情報学



ーヒトがモノを見る仕組みを理解する

私は視覚科学の基礎研究者という立場から、ヒトがどのようなメカニズムでモノを見ているか（眼に入力された情報がどのように処理されるか）に興味を持っています（下図参照）。

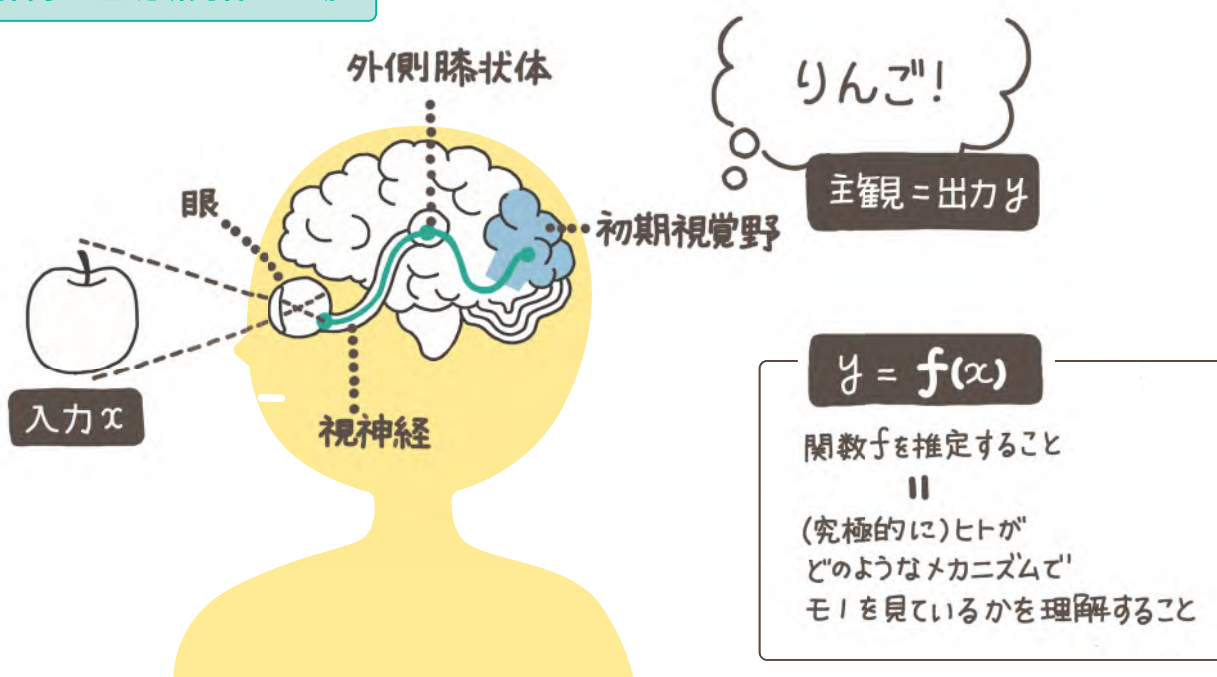
具体的には、心理物理実験という手法で実験的にヒト視覚系の仕組みを調査しています。モニタやヘッドマウントディスプレイを使って視覚的な刺激（画像や動画）を呈示し、実験参加者に一定の基準に従ってそれを判断し、その結果をキー操作等で応答してもらいます。その主観的な判断を複数回繰り返し、データに基づいて、ヒトがその刺激をどのように知覚しているかを解釈・考察しています。

私たちは普段の生活でも、身の回りに存在する色、形、大きさなど様々な視覚的情報を処理しています。その中でも、特に錯視（visual illusion）と呼ばれる

目の錯覚が脳でどのように生じているか、その処理メカニズムに興味を持っています。例えば、実際の物理的な明るさよりも、より明るく知覚してしまう「グレア錯視」を利用して、私たちの明るさ知覚メカニズムの解明に取り組んでいます。上述の実験手法に当てはめると、錯視が生じると考えられる図形とそうでない図形を同時に呈示し、どちらがより明るく見えるかを実験参加者に応答してもらう、といったアプローチを取っています。

統合失調症と診断された人たちは特有の視覚的・認知的な違いが生じ、それによって錯視の見え方が異なる可能性があります。困りごと学では、そうした知見を現場の声や基礎実験の両面から積み重ね、「診断の補助的役割を担える錯視の可能性」を期待して、プロジェクトを進めていきたいと思っています。

視覚科学の基礎研究者の立場





話題提供者 星野藍子

名古屋大学大学院医学系研究科総合保健学専攻
〔専門〕精神障害領域の作業療法・作業科学



一機能だけではなく社会という視点からも 困りごとを捉える

作業療法学の研究者という立場から活動と個人、そしてそれを規定する社会という枠組みやその相互関係に興味を持っています。

例えば、統合失調症の患者さんがお皿洗いのアルバイトで「お皿がどんどん運ばれてきて、食器を割ってしまう。仕事が遅いと怒られてしまう。」と困っていたら、どのような原因を考えるでしょうか。その人の発揮できる認知機能、お皿洗いという活動そのものが持っている要素、実施環境や人との交流などの文脈、さらにその人自身のアルバイトに対する動機づけや意味などが代表的な視点です。一方でその背後には活動や個人の在り方を規定する社会構造があります。例えば仕事に対する能力主義を重視する文化や障害がないことを前提に作られたルールなどは個人が社会の中で活動をする際には大きく影響を及ぼします。困りごと

の解決には様々なレベルでの着眼が求められます。

困りごとの解消のためにできること

①困りごとを明確にする

- ▶ どのような困りごとがあるのか探る
- ▶ 困りごとに関連していることを具体的にする

②当事者の語りを重視する

- ▶ 当事者が不在の状態では困りごとの本質を明らかにすることができない

③困りごとの背景にある社会構造に気づく

- ▶ 当事者が不在の状態で決められた社会構造こそが障害である
- ▶ 困りごとを個人に帰結したり、特定の状態にある人を弱者とみなしていないか
- ▶ 公正な社会構造があるか

困りごとと機能・生活・社会との関係



3. ワークショップでの議論

—モバイル端末などのタッチパネルを使いにくそうにしている方がいる

▶困りごとには情報処理や判断の難しさなど様々な要因が関係する。

視え以外の要素も含まれるが、操作を可能にするためには視覚の要素は考慮される必要がある。例えば、こうした使いにくさを考えることで、使う人にやさしいサービスや製品の開発にも活かされる。

—その人だけの体験や感じ方をどう考えるべき？

▶同じ病気といえども様々な困り感がある。

困りごと学は、どういうことに困るのかを考える枠組みでもある。扱う事柄によっては、基礎的な研究



により数字で示すことが重要なことと、なぜ困るのか、どう解決しているのかのプロセスを明らかにすることが重要なものに分かれるはずである。視点を使い分けて考える必要がある。

—困りごとの捉えなおし方について

▶ポジティブなアクションに向けて

困ることを明らかにする第1段階を終えた後、それがポジティブな価値観に繋がると良い。困ること全てをネガティブに捉える必要はなく、困ること自体に価値が生じることもあるはずである。場を通じてそうした議論もできると良い。

4. これからの展開

困りごと学では困りごとを明確に抽出する試みをしたいと考えています。当事者に対してのインタビューをもとに困りごとを抽出し、ライブラリの作成およびその公開をしていくことを目指します。この取組みにより、関連する知見と解決に向けた方法論を整理します。この取組みを基盤に引き続き他領域の研究

者とも共同した場の構築およびネットワーキングを行っていきます。

取組みに興味のある方はこちらへ

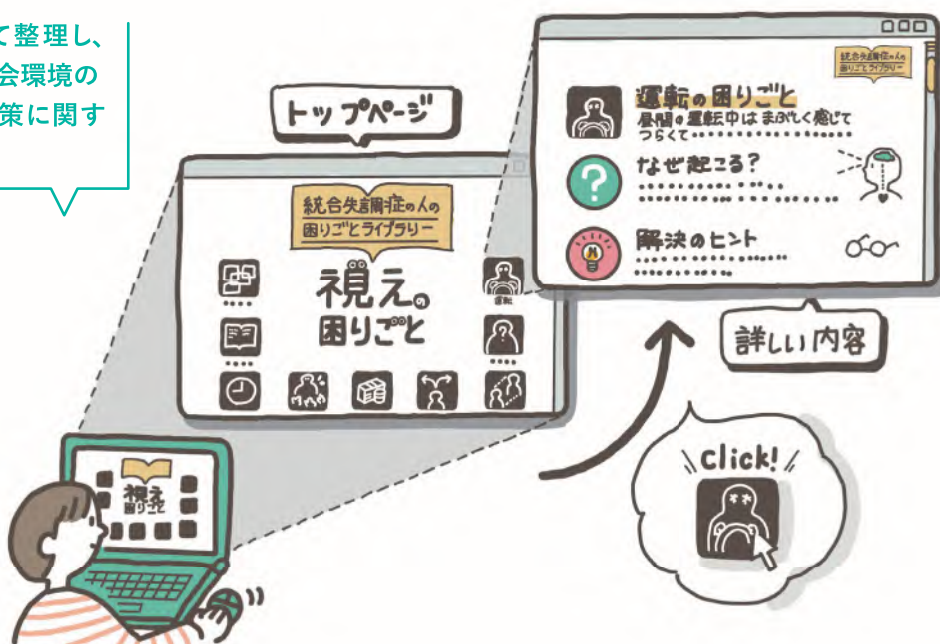
【困りごと学 HP】

<https://komarigoto.netlify.app>



ライブラリのイメージ

「困りごと」に着目して整理し、生物学的な要因や社会環境の影響を踏まえた解決策に関する知見を集約





京都大学

〔発 行〕 困りごと学事務局（京都大学大学院医学研究科 小方智広）

〔発行日〕 2025年1月27日